



## 発展途上国と自然保護

「発展途上国」というと、人びとは「文化的水準は低くとも、そこには緑の平原が拡がり、豊かな自然がある……」と想像しがちであるが、じつはこれとほど遠いのが現実である。

現在、地球上では一年間に、サハラ沙漠に匹敵するくらいの面積が沙漠になりつつあるという。このおどろくべき沙漠の増加の原因の一つは、爆発的な人口増加になやむ途上国が食糧をうるために、飼養可能な多数の家畜を放牧する結果、草が根こそぎ喰いつくされてしまうことにあるという。またネパールなどでは、燃料のために灌木を伐採していることが土地の荒廃につながるとされている。一たん沙漠化すると、もとの緑地に復元することは至難であるから、なんとしてでも沙漠化を未然に防止することが肝要であり、国連でもこの問題と真剣にとりこんでいる。

この点から見ても、わが国の企業が国内森林資源の減少から、海外に進出し、莫大な量の森林を伐採していることは反省の必要があるろう。二、三年前オーストラリアに滞在中、メルボルンの自然保護団体の漫画によるアピールを見たことがある。「どうも日本人らしい顔つきの男達がユーカーリの林を、バッサバッサと切倒し、どんどん製材工場で製板する。やがて伐採あとに大規模な植林をすることに

なるが、なんと多量の製材は苗木を入れる箱をつくるために、すべてが用いられてしまった……。という風刺の漫画であった。もちろんオーストラリアは途上国ではないが、多量の鉱産物や木材を日本に輸出する点では、途上国の人びとの感情とも共通するものもっており、私はこのアピールの中に、日本とその企業に対する途上国の人びとの痛烈な声なき批判を聞く思いがした。

私達はつねに自然保護を口にし、その推進のために多少の努力はしているが、それは決して、わが国の自然だけに向けられたものであってはならない。

一九七九年八月には国連主催の重要な会議「発展のための科学技術国連会議」がウィーンで開催される予定で、ここでは先進国がどのようにして科学技術を通じて途上国の発展に協力してゆくかが、もっとも重要なテーマに掲げられている。われわれは過去において日本の自然を破壊し、公害をまきちらしつつ繁栄をのみ図ってきた過ちを反省し、「かけがえない地球」全体の自然保護のために、とくに発展途上国の人びとの連係を深めて行かなければならないだろう。

(副会長)